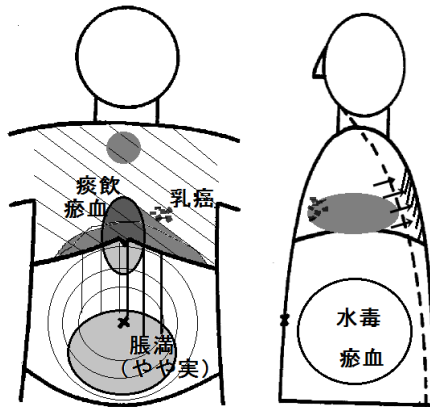


母83歳は昨年6月に肺炎で1週間程入院しているが、その時の検査で左乳房に癌があることが分かった。医師によると、初期で増殖性は少なく、女性ホルモンを栄養にしているものと言う。副作用が少ない、女性ホルモンを抑える薬を勧められた。今はおとなしくとも、急に増殖し始めることがあると。また詳しい検査をしたいとも言った。

しかし私は母に強く勧め、そうした処置を断り、半年後の再検査をお願いした。医師からは早めの再検査を強く勧められたが、断った。

西洋医学における通説的治療を批判する西洋医学者(近藤誠氏・安保徹氏)の見解を参考に、私が把握している癌のイメージはこうである。①「癌」と診断されるものの中には、転移する真正の癌と、転移しない偽の癌がある。②癌種は常に体内に発生しており、体内に好適な培地があった時に「発芽」する。



好適な培地はその部分の免疫【乳癌。気管支炎は収まった状態】

力低下により生まれると。癌が治ったという症例には多くの偽の癌が含まれているわけで、その治癒率は真正の癌に対しては当てにならない。抗癌剤の様に免疫力を全身的に下げってしまう処置は、転移や新生を促してしまう。患部と全身の免疫力を高める治療が必要である。特に患部に対する治療は鍼灸が有効である。

乳癌と診断されてから、週2回の鍼灸治療を始めた。ちなみに母は咳き込み易く、気管支炎・肺炎になり易い体質であるが、家事や植木の世話、夫や孫の面倒をして、元気に暮らしている。

母の左乳房には右乳房では感じられない邪気を感じる。そしてその背面である左肩甲骨下部

にも邪気の放射がある。実はそこは肺炎の時に自覚痛があった場所であり、普段でも凝っている部分である。

舌の裏にある静脈が赤黒くはっきりとしており、また下肢に赤い糸を埋め込んだ様に見える血の滞りが多くあることから、胸の内部には慢性的に痰だけでなく、瘀血も存在していると思われた。つまりそうした慢性的に滞り、免疫力が低下した場所であるからこそ、癌種(あるいは偽の癌種)が「発芽」してしまったのだろう。

乳癌との診断後、半年経って、超音波検査を受けた。乳癌の様子は多少変化していたが、ほぼ変わらぬ大きさだった。そして、更に週1・2回の鍼灸治療をして、更に半年が経ったが、その頃には左乳房付近の邪気はほとんど感じられない様になっていた。期待して、検査に臨んだが、ほぼ同じ大きさであった。活動性が落ちているのではないかと想像する。

『がん放置療法のすすめ』という本を近藤氏は昨年、出されている。癌と診断された場合、多くの方は、現在の癌常識により転移を恐れて、あわてて西洋医学的処置を受けるわけだが、それは良策ではない。実際に支障が出た時に、はじめて何らかの処置を受けることを勧めている。その方が生活の質を落とさず、余命も長くなると実例を載せている。癌常識が変わらなければ、多くの方にとって不幸である。

残念ながら、東洋医学は近藤氏の眼中になく、西洋的医療を受けない放置を勧めているが、東洋的医療を受けた方が、より救われる患者が増えるはずである。(2013年8月立秋)